

## 協働的学びの場としての自主参加による海外教育実習 —タイでの英語教育実習『プアン・プログラム』—

山崎友子<sup>\*</sup>・James M Hall<sup>\*</sup>・Mike Unher<sup>\*</sup>

(2010年1月25日受理)

Tomoko YAMAZAKI・James M HALL・Mike UNHER

Voluntary Overseas On-site Teaching Practicum as a Collaborative Learning Opportunity:  
The “Puan Program” On-site English Teaching Practicum in Thailand

### I. はじめに

本稿は、岩手大学教育学部英語教育科で実施しているタイ国中等学校における英語教育実習の概要を報告し、現段階でのその成果の分析をもとに、実践的指導力を育成するための教育実習のあり方の一つとして、協働性・自発性をキーワードとする教育実習を提案するものである。教員に求められる力量として、教育現場の多様性の体験的理解、柔軟な対応力、互いに学び合う同僚性・協働性は欠かすことができない。しかしながら、これらを達成するのは必修科目として提供される制度的教育実習のみでは困難である。このような問題認識に基づいて、本稿で取り上げる海外教育実習は学生の自主参加による実習として2003年の試行を経て、2004年度より「プアン（友情）・プログラム」と名付けて、実施しているものである。

### II. 英語教師の実践的力量

実践的力量のある教師とはどのような教師なのであろうか。Sato (2002) は次のように述べている。

“The most skillful teachers are reflective teachers.

For innovation [in English language education] to happen, we must find ways to help teachers to become lifelong learners in a collaborative environment.”<sup>i</sup>

教師は自身の実践を振り返り、内省することにより実践を改善していくことができる。英語教育を改革するには、そこで教育に携わる教師に協働的な環境を提供し、生涯にわたって学び続けることができるように支援しなければならないという。教員養成においても同じく、思慮深く内省的で学び続ける姿勢を育成すること、それを促進する協働的環境を提供することが鍵となる。

さらに、英語教師にとっては英語運用能力も力量の一部である。『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』<sup>ii</sup>において、英語教員が備えておくべき英語力の目標値として、英検準1級、TOEFL550点、TOEIC730点程度という数値が示され、英語教員の採用の際にこの数値の所持を条件の一つとすることが要請されている。従来の教育課程を補足する手立てが求められている。

### III. タイの英語教育

プアン・プログラムの受入校は、タイ国にある。タイ国は近年の経済の飛躍的な発達に伴い教

<sup>\*</sup>岩手大学教育学部

育面でも様々な改革が進められている。1997年に新憲法が公布され、新憲法のもと1999年に教育法が制定され、2001年より施行されている。これにより、義務教育は12年となり、教科では科学・英語が重視され、教員研修が進められている。教員免許を取得するための教育実習期間は、プアン・プログラム開始時には、指導者付の実習が2週間、指導者なしの実習が16週間と日本よりも長かった。このことは、実習生の受入に抵抗が少なかった要因の一つと思われる。

英語は「4つのC」と言われる下記の4つの観点から授業改革が行われている。

- Communication skills (コミュニケーション・スキル)
- Connection of English with other subjects (英語と他の教科の関連付け)
- Community: use English in and outside school (地域: 学校の内外で英語を使用すること)
- Culture: understand the culture of other countries (文化: 外国の文化を理解すること)

文法シラバスによる英語教育ではなく、言語使用を重視したものと言える。

タイの公立中等学校は中学校と高校が併設されており、マテヨン (Matthayom) と呼ばれる学年が1年から6年と通し番号となっている。年間計画・目標の作成は各教員に委ねられている部分が大きく、それに合わせて教材が作成・決定されており、学校および教員個々の裁量の度合いが高い。

日本の中学校・高校における教育実習では、日常的に実践されている教授スタイルを踏襲することが求められることが多く、コミュニケーション型な指導方法 (Communicative Language Teaching) の練習の場となりにくい。タイの中等学校では言語使用を重視した英語教育が目指されていることから、日本人実習生はコミュニケーション型な指導方法を実践することが求められ、日本での制度上の教育実習とは異なる指導方法の実習の場となる。また、4つのCのうちのひとつが「文化 (Culture)」であることから、日本を取り上げたトピックが期待され、教材作成の実践的練習の機会ともなる。

#### IV. プアン・プログラムの概要と実施状況

タイ国における英語教育実習である「プアン・プログラム」の概要と実際の実施状況を以下に述べる。

##### (1) 経緯と概要

大学間学術協定を締結しているタイ国サイアム大学の斡旋によりアユタヤ郊外にあるバンサイウテヤ中等学校を受入校として2003年度の試行の後、2004年度から岩手大学教育学部英語教育科のプログラムとして実施した。英語教師を目指す学生を対象として、タイの中等学校で英語の教育実習を行うものである。1時に5名を上限とし、受入校の教師の自宅にホーム・ステイをしながらグループで実習を行う。2005年度にはサイアム大学・バンサイウテヤ中等学校・岩手大学教育学部の3者で協定を締結し、「プアン (友情)・プログラム」と名付けた。実習期間は1～2週間である。目的は、実践的授業力をタイで自発的に学ぶ機会を提供することである。

##### (2) 受入校

タイ国の古都アユタヤ市の郊外にあるバンサイウテヤ中等学校 (Bangsai Witthaya Secondary School) が2007年度までの受入校である。生徒数746名。マテヨン6年生 (高校3年生にあたる) のうち20%が大学に進学する。2期制で、年間授業日数は200日。1日に7授業時間がある。各学年別の人数は表1に示したとおりである。(2005年の場合) 英語科教員は5名である。そのうち2名を2006

表1 バンサイウテヤ中等学校の学年別生徒数

マテヨン	生徒数	学級数
1年	189人	5学級
2年	179人	5学級
3年	183人	5学級
4年	68人	2学級
5年	56人	2学級
6年	71人	3学級

年度に岩手大学へ招聘し、互いの教育事情についての理解を深めた。

2009年度はバンコク市内の二つの学校が受入校となった。この学校については稿を改めて報告したい。

### (3) 学生の参加状況

2004年度から2006年度までは夏期と冬期（2005年度は夏期1回、冬期2回）、2007年度は夏期のみ、2009年度は冬期のみ実施した。（2008年度は休止。）合計のべ38名の学生が参加した。日常の授業の取組の様子から参加を許可しなかった学生もある。表2に参加学生の人数と学年を示した。

表2 参加学生の学年別人数

年度	2年生	3年生	4年生	計
2003			2	2
2004夏		3	(卒1+)	4
2004冬		4		4
2005夏	2			2
2005冬1		5		5
2005冬2		3	1	4
2006夏	4			4
2006冬	3	2		5
2007夏	1	2		3
2009冬	1	3	(留1)	5
計	11	22	5	38

注1) +は二度目の学生

注2) 卒は、卒業生

注3) 留は、留学生

3年生の参加が最も多い。ホーム・ステイであること、タイの物価が日本より安いことから、滞在費が欧米・豪州より低額となっているが、学生はまとまった金額の参加費を準備する必要がある。2006年より、教育学部教育後援会より一人1万円の援助を受けている。

### (4) 参加条件・事前準備

「英語科教育法Ⅰ」を履修済みであること、授

業への出席状況が良好であることを本プログラムに参加する条件とした。

事前準備として、教員と前年度の参加者によるオリエンテーション（海外旅行の手続き・心得・保健、受入校・タイの文化について等）と授業準備（挨拶、数、日本の昔話、電話での会話、買い物、就職面接試験等のトピックを扱う授業案作成）の他、アンケートを実施した。

### (5) 実習内容

実際に実習ではどのようなことを行ったか、2004年夏期を例に記述する。

- マテヨン1年生から6年生（中学校1年生から高校3年生）への授業。学生4人のチームティーチングによる。
- 授業内容は、トピックは日本のスポーツ、浴衣、夏祭り、玩具、表現はI like, Do you like?, Do you know?, What's this? How much? How many?/ Situational conversations、「桃太郎」。
- 全校集会での日本紹介。
- アユタヤ地区教員研修会の講師  
(English Resource and Instruction Center / the English Camp at the Office of Ayutthaya Educational Area)

## V. 参加学生の実践と変容

### (1) 引率教員の観察より

2005年度に引率した教員（James Hall）の観察ノートを見てみると、実習生の指導とそれに対するタイの生徒の反応は次のようであった。<sup>iv</sup>

- 日本人実習生とタイの生徒の共通言語は英語であり、実習生は日本での教育実習と異なり、指示のすべてを英語で行わなければならない。言語面の不十分さとトピックが日本独特の風物習慣であることから、生徒が理解に困難を感じている場面があった。
- しかし、タイの生徒は実習生から真剣に学ぼうとしており、授業に本当に興味を示している様子がはっきりと伺われた。
- タイの生徒はにこやかに授業を受けており、実

習生が準備した浴衣を着てみるなど、積極的な姿勢が見られた。

- 教室の後部の生徒の注意を引き付けるのは不十分であった。
- 生徒は授業の中で自然に英語を使っていた。例えば、日本の玩具を持って活動を始める際には、“What’s this?” と即座に質問していた。
- 「シーズン・バスケット (Season Basket)」<sup>iii)</sup> は不思議なくらいタイの生徒の関心を引き付けていた。(写真1参照)



写真1 シーズン・バスケットの指示を出す教育実習生とタイの中学生

実習生の授業内容・技術の変容については次のように記載されている。

#### 1) 授業計画

- 構造が意識された
- 活動を課の目標に関連付けた
- トピックを一つに絞った
- 生徒のレベルに合うようにクラスによって授業案を変えた
- 「まとめ」の時間をとった

#### 2) チーム・ワークがよい

#### 3) 授業技術について

- 教材・資料に工夫がある
- 板書の技術が向上 (写真2・3・4参照)
- 「練習」のための活動が多様になった
- 目標となる表現を示して見せるようになった



写真2 ロール・プレイを楽しそうに行うタイの生徒と整理された板書



写真3 板書計画1

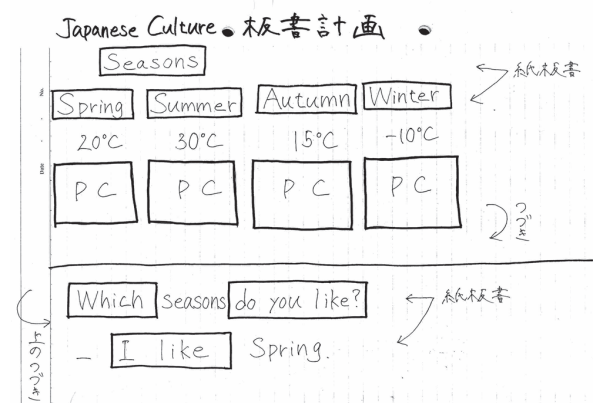


写真4 板書計画2

#### (2) 実習生へのアンケートから

2005年度の実習生を対象に、外国語学習観を問うアンケート<sup>v)</sup>を実習前と後に実施した。下記の項目は変化の大きかったものである。

- 「一般的に、英語が流暢に話せるようになるには英文法の規則を知らなければならない」  
肯定が6名から2名に減少。
- 「生徒が英語を話すときによく間違えるところは、口頭のパターン・プラクティスを十分に行わなければならない」



肯定するものが5名から3名に減少。

- c. 「一般的に、リーディングやライティングを学び始める前にスピーキングとリスニングの基本的スキルを身につけなければならない」

肯定するものが1名から5名に増加。

文法シラバスに準拠した指導からコミュニケーション活動を取り入れた口頭表現を重視した指導へ志向が変化していることが伺われる。

### (3) 教育実習生のコメントから

帰国後の報告の際、実習学生は例外なく、日本の教室風景と異なる点として、タイの中高生がすべて英語で行われる英語の授業を自然に受けとめ、授業の中で恥ずかしがらずに自然に英語を使おうとしたことを挙げる。4つのCを柱として言語使用に重点を置いた英語教育を体験しているのである。その中で有効な指導方法を工夫することにより、外国語学習観も影響を受けていると考えられる。

また、片言ではあるが覚えたてのタイ語を授業で使ってみた実習生が多い。それがタイの中高生に歓迎され、大きな喜びを感じている。相手のことを尊重することが相手を尊重することにつながることを体験的に学び、英語指導・学習を超えた異文化理解となっている。

### (4) 受入校の指導教員からのコメント

バンサイウテヤ中等学校で教育実習生の受入の中心的教員である Mrs. Sureerat から、本プログラムについて次のコメントがあった。

- A gift to Thai students: They can enjoy Education. They are improving English skills.
- A gift to Thai English teachers: the Puan Program is serving a need in Thailand.

教育実習生を訓練を必要としている未熟な存在としてではなく、生徒ばかりか教師にとっても教育的な存在として受入れていただいていることばである。実習生との関係が、様々な助言をいただく関係ではあるが、一方通行の関係ではなく、協

働的な関係となっていると言える。

また、タイの中高生の反応が、英語を母国語とする欧米出身の英語指導助手に対してよりも日本人教育実習生の授業の方に積極的であるとの感想もあった。年齢が近いことや同じアジアの人間として親しみを感じるためかもしれない。

### (5) タイの中高生のコメントから

バンサイウテヤ中等学校のレポートが届いた。その中に生徒の感想がある。そのうちの1編を紹介しよう。

I had studied at Bangsai Withaya School for three years. I was very impressed with the place and the most important thing was that I had a good opportunity to meet Japanese student teachers invited to our school by the English Department. I had a lot of fun in learning English with them both inside the classroom and outside the classroom. Although my English speaking skill was not so good, I tried my best every time to speak with them. It helped me to be more confident in speaking. vi

先生のコメント同様、生徒にも実習生に対する親和的なつながりが感じ取られ、プアン・プログラムを積極的に評価していることがわかる。

## VI. まとめと今後に向けて

教育現場の多様性の体験的理解、柔軟な対応力、互いに学び合う同僚性・協働性をもった教師養成のための実習の試みとして本プログラムは位置づけられている。海外ということばも文化も異なる教育現場は、「多様性」という点でこの上なく日本の教育現場と異なっている。実習生は日本語や教科書に頼ることなく、外国の生徒の学習状況を把握し、理解可能なインプットを与えなければならない。対応を間違えると危機的状況を招くこの「多様性」を、日本人教育実習生は「心地よい」ものとして体験している。その要因として、タイの受

入校が実習生を未熟な指導すべき存在としてではなく、生徒や教師が学ぶことのできる存在として肯定的に受入れていること、タイの中高生が若い実習生を親和的な態度で受入れていること、実習生同士が同じ家庭にホーム・ステイし、その日の実習の振り返りを次の授業に生かす準備をすることができること、送り出す側の指導者が学生の自主性を尊重しつつも準備を支援していることなど、様々なところで「協働的」と言える関わり合いが見られることを挙げることができる。タイの教育現場が学校や教員個々の裁量部分が大きいこと、タイの英語教育がコミュニケーションを志向して改革の途上であることが、これらの協働的関係を様々なところで創り出すことを可能にしている。

学びは、学習者に何を与えるかではなく、学習者が学んだものによって測られる。したがって、教員養成にあたっては、学習者の内発的学びを引き出すための仕掛けとなるプログラムも重要であり、その意味で「プアン・プログラム」は有効性があると言えよう。2009年度から受入校がバンコク市内という都市部の学校に移った。タイの中でもこれまでの地方の学校とは異なる背景の中にある。実習生の意識調査・実習の確実な記録を継続して行い、実習生の帰国後の変容にも注目して更なる分析を進めたいと考えている。

## 注・引用文献

- <sup>i</sup> Sato, K. (2002). Practical understanding of CLT and teacher development. In S. Savignon (Ed.), *Interpreting Communicative Language Teaching: Contexts and Concerns in Teacher Education*. New Haven: Yale University Press.
- <sup>ii</sup> 文部科学省。平成15年3月31日決定。
- <sup>iii</sup> 「フルーツ・バスケット」を応用したゲーム。果物の代わりに、季節の名称を使う。鬼の言った季節にあたっている生徒は、席を立ち、別の席につかなければならない。席が一つ足りないため早く座る競争になる。
- <sup>iv</sup> 原文は英語。第一著者による翻訳を記載した。
- <sup>v</sup> Beliefs about Language Learning Inventory (BALLI) を利用。  
(Horwitz, E. 1987. Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden & J. Rubin (Eds.), *Learner strategies in language learning*. (p.p. 119–129). Englewood Cliffs, NY: Prentice Hall.)
- <sup>vi</sup> Foreign Language Department, Bangsai Witthaya School. (2008). A Report On Feeling and Opinion of Matthayom Six Students Towards the Friendship Program (Puan Program) During Academic Year 2003–2008.

## 付記

本研究の一部は文部科学省研究費補助金（萌芽研究 課題番号17653109、平成17～19年度）によって行われた。また、「プアン・プログラム」はタイ国のサイアム大学国際交流部ウサニ博士と受入校バンサイウテヤ中学校英語科スリラット先生のご尽力により実現しており、記して感謝の意を表する。